

新社長インタビュー

差別化図り景気に左右されない経営体質へ

近畿工業 和田知樹代表取締役社長

破碎・選別機メーカーの近畿工業(本社=兵庫県神戸市)は8月19日付で前専務取締役の和田知樹氏が代表取締役社長に就任した。同社は累計2,000台以上の販売実績を持つ二軸破碎機の国内トップシェアを誇ると同時に、鉄・非鉄スクラップの複合物である工業系雑品処理に特化した「スーパーシュレッダー」や小型家電破碎処理機「V-BUSTER」を開発し、その高い評価から金属リサイクル業界のユーザーも着実に増加している。ユーザーニーズの多様化や技術の進歩を求められるなかで、最近では将来的に大量廃棄が見込まれる太陽光パネルのリサイクル設備「ReSola(リソラ)」の開発を始め、今年3月に行われた「2019NEW環境展」では試験的に金属選別ロボットを出展するなど、常に時代背景を先読みし、ユーザー視点に立ってモノづくりをすすめる同社の目指すべき方向性や意気込みについて、和田知樹新社長に話を伺った。



和田知樹 代表取締役社長
1980年12月16日生まれ、38歳。兵庫県出身。2003年甲南大学法学部卒業、2011年ウエスタンワシントン大学卒業、2014年4月近畿工業取締役、2015年8月取締役営業本部長、2016年8月専務取締役、2019年8月代表取締役社長。趣味は釣り。

かに魅せられるかについて色々考えた。金属リサイクル業界に参入し、認知度も向上していた時期でもあっただけに、少しの工夫が来場者数や受注案件の増加といった数字にも表れるようになった。ここ最近の取引先を見ると、金属リサイクル業界が目立って増加しており、それが自分だけでなく、会社の自信にも繋がっている。

自動プラントの早期実現で 人手不足解消

ーリサイクル機器の開発について

二軸破碎機の主要ユーザーである自治体や産業廃棄物処理企業といった従来の顧客を大切にしていくと同時に、産業廃棄物と金属リサイクルの垣根がなくなってきただけに、金属リサイクル業界へも軸足をさらに広げていく。一口で破碎機

と言っても、用途によって様々な種類があるが、当社は総合破碎機メーカーとして、産業廃棄物、金属リサイクル向けにも対応できるため、どちらでも市場シェアを伸ばしていくことは可能だ。

国内では製造業含め、リサイクル業界も人手不足に直面しており、その解決手段の1つが選別ラインの自動化と考えている。自動化はいかに回収の精度を向上させるかが課題であり、自動プラントの実現に向けて開発をすすめている。他社も選別ロボットの開発に力を入れているが、当社は有価物の中でも、金属回収に焦点を当てた選別ラインに強いこだわりを持ち、来年の環境展では進化した自動選別プラントを展示する予定だ。当社の機器は普及はしているけど、認知度が低い、縁の下の力持ちという気概を持って、多種多様なユーザーニーズに応えていきたい。

ー会社の目指すべき方向性について

製品開発とサービス部門では他社との差異化をすすめながら、景気に左右されない経営体質の強化を図り、100年企業を目指している。ここ数年、環境変化のスピードが早まっているが、当社は社員の平均年齢も36歳と若く、最先端のリサイクル技術を誇る日本もまだまだ発展の余地があると考えられるため、失敗を恐れず新たな分野へも積極的に挑戦しつづけていく。また、外国人の若手エンジニアを積極的に採用している。世界規模でリサイクル産業は将来も必要不可欠な産業であることには変わりないため、数年後に自国へ戻った際に、当社で積み上げた知識を発揮し、リサイクルの発展に役立ててもらえれば、当社も海外へアピールできるチャンスだと考えている。

金属リサイクル業界の顧客が着実に増加

ー社長に就任した

来年2月に父である社長(和田直哉・現会長)が役員定年を迎えるため、2020年に社長に就任すると思っていた。結果的に社長就任は前倒しとなったが、父の跡を継ぐという決意の下、入社した経緯もあり、その心構えは出来ていた。

ー主に営業畑を歩んできた

入社してすぐは当社の強みと弱みを探り出していた。1つの会議にせよ、きっちりと時間を決め、目的意識を持つことで、会議時間の短縮を図れた。また、効果の見込める広告デザインのほか、機械の展示会についても、やみくもに詰め込むのではなく、海外のようにい



3月に行われた「2019NEW環境展」では小型の工業雑品や小型家電雑品などを破碎対象とする「V-BUSTER」を始め、廃太陽光パネルリサイクル設備「ReSola」を出展し、同社ブースに昨年比1.7倍の見学者が訪れた